

## 草枕そゞろごと

小野島, 行人

<https://doi.org/10.15017/2556555>

---

出版情報 : 文學研究. 33, pp.163-182, 1943-12-30. 九州文學會  
バージョン :  
権利関係 :

# 草枕そゞろごと

小野島行人

はしがき

こんなことを書くのはどうかと思つたが、わたしは草枕の作者と讀者のあひだに居るやうな因縁にふと爲つたので、これも夏目さんを或る變つた方角から觀るたよりもなると思つて、ロマンスにゆかりの深い小牧先生に御話するつもりに成つて、草枕についてわたしの見たまゝ聞いたまゝを書いてみる。ところでわたしの見たまゝは其れでよいとして、聞いたまゝには、こんでも無いまぢがひが有るが、これも亦ある運つた方角からの觀かたとして面白いので、聞いたことは其のまゝを云ふつも

りである。

わたしが五高に行つて一年ほどして、何かの折に友人から「草枕の那古井は金峰山きんぷうさんの向ふの海岸の小天てんといふ處で、その温泉宿は今もあつて、以前のもとことではあるが五高生でお那美さんのお酌で酒をのんだ者さへあるさうだ」といふ話を聞いた。そのころ夏目さんのものを次から次と耽讀して居たわたしは、是れはくゞとばかり欣んで、その小天に行つた。それは春のうららかな日であつた。

小天の茶店できいてすぐわかつた温泉宿（地圖「小天村湯ノ浦」の浦の字のそばの温泉のしるしの所）に行つ

てみると門に「漱石館」といふ札が掛けてあつた。それを見てあたつたぞと云ふきもちと、何だか興をそがれたやうな感じがした。これはあとで聞いたことであるが、

この漱石館といふ

名は村の小學校の

先生がつけたのだ

さうだ、さも有り

なん。

あたりの地形と

家づくりとは、

草枕に「山が盡き

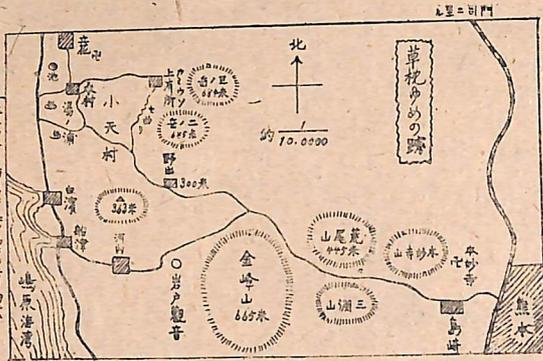
て、岡となり、岡

が盡きて、幅三丁

程の平地となり、

其平地が盡きて、海の底へもぐり込んで、十七里(西四

里)向うへ行つて又陸然と起き上がつて、周圍六里の摩



那島(島原半島の雲仙岳、一三六〇米)となる。是が那古井の地勢である。温泉場は岡の麓を出来る丈崖へさしかけて、岨の景色を半分庭へ圍ひ込んだ一構であるから、前面は二階でも後は平屋になる」とある其のまゝであつた。

あんないされて、梯子段をいくつか上つて行くと、草枕の畫家が泊つたのにあたると思はれる部屋があいて居たので、そこに這入つて外がはの障子をあげたら、庭の東南のすみに、草枕のそれかあらぬか、海棠の古木に花が今をさかりと咲いてゐたのは嬉しかつた。

どてらに着かへて、来たときよりも梯子段を一つよけいに下りて、家の西北の角にある、かなり廣い湯殿に行つて、東京で朝風呂に這入りつけたわたしにはぬる過ぎる、温泉にゆつくり浸つた。湯殿には温泉の浴槽のほか小さい浴槽があつて、それは温泉を薪でわかつて熱くしてあつて、その浴槽には村のお婆さんが孫娘らしい子

と一しよに這入つて居たが、そのお婆さんに、草枕にあることを其れとなく聞いてみたが、お婆さんは何も知らなかつた。

部屋にかへると、宿のお婆さんが夕餉の膳をもつて來た。島原海灣でとれた生きのいゝさかなで、お銚子をかへてのみ乍ら、お婆さんに草枕のことをたづねると「それは、此の家が小天の殿様とまで云はれた前田さんといふ大地主の隠居所でした時のことで、わたくし共は、此の家が前田さんでいらなくなつたのを譲りうけて、宿屋をはじめました。前田さんの御隠居はもう亡くなられ、岡の上にあつた本宅は火事で焼けて、今は本家の奥さまが姪ごさんと此の下の別邸に暮しておいでなさります。あつちの部屋にやつばし五高の書生さんがずつと來て御坐らつしやりますが、其のかたは前田さんの奥さまの所に行かつしやつたから、聞いて御覽じ」と云つて前田家のことについて色々はなしてくれた。

夕餉をすまして向ふの部屋に行つてみると、それは見知りごしの中井さんで「やあ！ 君も草枕で來たんですか、僕もはじめは其れで來たんですが、此處のおちついた調子がきに入つたので、此の春やすみをずつと高文の準備をやり以來てゐるんですよ。草枕のことなら、此のすぐ下に前田の本家の奥さんが居るから、行つて聞けば何でもよくわかりますよ。だが、あんまり能くわかり過ぎると、現實暴露の悲哀におち入りますよ。なかに、本家の奥さんはささく話ずきの人だから、誰が行つても大喜びであしらつてくれますよ。君もぜひ行つてみるんですよ」と先輩だけに指圖してくれた。

翌日にはさて置いてもと、宿のすぐ下の前田家の別邸（地圖「小天村湯ノ浦」の湯の字のそばの温泉のしるしの所）を訪れた。先輩の云つたとほり、本家の奥さん前田ふじ刀自は、東京の下町そたちのささくな御かたで、不仕つけにわたしが訊ねるのを面白さうにうけて、草枕

のこと前田家のことなどを、あけすけに話して下さつた。それでわたしは、桃太郎が鬼が島から歸つたやうなきもちになつて、熊本に歸つた。

それから、友だちの誰れ彼れを連れ出して、わたしは小天に行つた。幾たび目かの時に、ふじ刀自が「書生さんが宿屋どまりで遊び歩くなんて無駄なことだから、此れからは宅にお泊りなさい。御遠慮なんかいりませんよ」と仰つたから、其れからわたしは小天に行くたびに前田家に泊めていたゞいて、夏やすみなどには幾日も滞在したことがあつた。

別邸は二ノ岳の裾が平地につゞく處を宅地の東にとり入れ、そこからは清水が滾々どわき出で、それが地からぬつと立ちあがつたやうな巨岩の根を洗つて、東から南にかけて廣い泉水となり、東南隅には宿屋のと同じやうにぬるい温泉の浴殿があり、西は埋立地から島原海灣のかなたに美しい雲仙岳を望んで、まことに趣きのある屋

敷で、家の東南の角で泉水の眺めをほしいまゝにする客間には、孫文先生の額がかけてあつた。この部屋の疊をあげると踊りの舞臺になるのださうだから、なか／＼凝つたものである。はじめて小天にわたしが行つたとき、縁側ちかく山櫻がしづかに咲いてゐた其の客間で、ふじ刀自の姪ごさんの點茶ちまをあちはつた長閑さは、今になほ忘れられない。

斯やうにわたしは小天に行く路と、小天の天地と、前田家の別荘とが、すつかりきに入つて、しげ／＼小天に遊びに行くうちに、村の人たちとも近づきになり、自然いろ／＼な話を聞いたりして、その頃のわたしは草枕の天地にまつたく浸りきつて居るやうな態であつた。それで何斯と知るやうになつたが、草枕の畫家よりも更らにのんびりして居るわたしは、別にしらべるといふ風ふうでなしに、たゞ折にふれて漫然と聞いた迄である。それを其のまゝ書いたら、だらしの無いものになるから、つ

まらぬのは捨て、幾らかすぢ道をつけて書くつもりである。

### 草枕の天地

熊本（「城下」）から西して、加藤清正開基の本妙寺の南の島崎を通つて、金峰山（「ベケツを伏せた様な峰」）の東の三洲山（「少し手前に禿山が一つ」）とその北の荒尾山の間をのぼつて、金峰山の北の裾に出ると、路が分れて左はだら／＼下りて岩戸観音に行き、右は更らにのぼつて野出に行く。

岩戸観音は謡曲の檜垣のはじめに「是れは肥後の國岩戸と申す山に居住の僧にて候ふ。さても此の岩戸の觀世音は、靈驗殊勝の御事なれば、暫く參籠し所の致景を見るに、南西は海雲漫々として萬古こゝろの中なり。人稀にして慰み多く、致景あつて郷里を去る。まことに住むべき靈地と思ひて、三年が間は居住任りて候ふ」とあり

草枕そゞろごと

之れはもとより作者元清の假想で、海は山にさへざられて見えないが、南畫さながらの風致があつて、耶馬溪にもまさる桃源である。野出は草枕の畫家が休んだ茶屋のある處で、峠と云つても海拔一千尺ぐらゐの、路も樂々とした峠である。草枕の畫家は「七曲り」にかゝつてから程なく馬子にあつて「こゝらに休む所はないかね」ときくと、馬子が「もう十五丁行く」と茶屋がありますよ。

大分濡れたね」と云ふが、其の七曲りは野出のてまへの樂なところで無く、野出から小天に下る路を右にはいつて、二ノ岳の西北の裾をまはつて上有所に行く途中にあつて、かなりに歩きにくい所である（路は頗る難儀だ）。また茶屋の婆さんが「いゝ具合に雨も晴れました。そら天狗岩が見え出しました」と云ふ「天狗岩」はもとより近くに名のあるやうな巨岩は一つも無い。

野出の茶屋は、家は夏目さんの頃のまゝであつたが、住者はかはつて居て、わたしの頃は老人夫婦と息子と娘

この四人暮しであつた。爺さん婆さんはわたしが行くこまめにもてなしてくれまし、あたりの山のなごやかな景色や、家のつくりが如何にも田舎びて居るのが嬉しかったので、わたしはよく泊つたりした。ぢいさんは酒すきの好々爺で、ばあさんは、はたで見て感心するやうな、ぢいさんの家來さながらの妻女であつた。斯ういふ夫婦は熊本にはよく有つて、客にとつては微笑ましいものである。ところで、何時かわたしは小天への路すがら、野

出の茶屋のてまへで、鄙にはまれな目はなたちの齋つた女が、あかん坊をおんぶして下ると行き逢つた。それが、もの靜かな山の景色から浮び出たやうに見えて、はつと思ふやうに美しかつた。そこで茶屋のばあさんに「いま熊本の方へ下りて行つた女子は野出のものな」とさいたら、「彼人が此所にもと居た人の娘子で、本妙寺の近くに嫁入つてござりますたい」との事であつた。それで、其の女の母おやが、草枕の茶屋の婆さんとすれば、

それこそ「寶生の舞臺」の高砂の姫のやうであつたらうとも思はれた。

草枕の茶屋の婆さんがもの語る「長良の乙女」のはなしは、萬葉集卷第九にある「過葦屋處女墓二時作歌一首並短歌」と、卷第十九にある「追三和處女墓歌一首並短歌」とから引いて、大和物語に「昔津の國に住む女ありけり。それをよばふ男、ふたりなむありける」云々のはなしとなり、尙ほ謡曲の求塚（古名は處女塚）となつた菟名日處女（菟原處女）の傳説を、あつさりと採り入れた迄で、小天あたりには、其れと似よりの話の影も無い。野出から二ノ岳の西南の裾を横たくりに行くと、やがて路は下りとなり、其處らは一面的みかん山で、みかんが色づいた時にはほんとに美しい（其時蜜柑山に蜜柑がべた生りに生る景色を始めて見た）。目の下はるかに島原海灣をへだて、雲仙岳を見おろし乍ら、其のみかん山をくだると、路が小天の本村へと湯ノ浦へとに分れる所

の右手に、前田本家の邸宅の跡があるが、「三丁程上ると、向うに白壁の一構が見える。蜜柑のなかの住居だと思ふ。道は間もなく二筋に切れる」、それが火事で焼けない以前は、夜ともす其の邸宅の灯のかす／＼が、小天の海上を行く舟に燈臺の役をしたと云ふことである。

それから五六丁くだると、前田家（志保田）の隠居所であつた小天（「那古井」）の湯ノ浦の温泉宿につく（「へえ、志保田さんと御聞きになればすぐわかります。村のものもちで、湯治場だか隠居所だかわかりません」）。

寺は小天の本村のすぐ北の立花に一つ有つたきりである。それは眞宗本派の寺で、住職は説教が上手ときいて居るから、草枕の觀海寺の和尚と、まるで方角のちがつた人柄であらう。其の寺は、海岸ちかくの岡の上にあるので、海は見えるが（「石磴を登りつくしたる時、朧にひかる春の海が帯の如くに見えた。山門を入る」、山門も無ければ裏に池も無い）鏡が池に來て見る。觀海寺の裏

草枕そゞること

道の、杉の門から谷へ降りて向うの山へ登らぬうちに、路は二股に岐れて、おのづから鏡が池の周囲となる」。

小天に池は、前田家の別邸の泉水のほかに、本村から立花に行く左手の田圃の中に、名もない池が有つたきりである。參謀本部の五萬分の一の地圖には、其所に池のしるしが有るから舊はよほど大きな池であつたに違ひ無いが、だん／＼埋め立てられたと見えて、わたしが見たのは二坪ばかりの小池に過ぎなかつた。田圃の中の池では、いくら大きかつたにしても草枕に「池の縁には熊笹が多い。ある所は、左右から生ひ重つて、殆んど音を立てすには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始つて、どこで終るか一應廻つた上でない」と見當がつかぬ。あるいて見ると存外小さい。三丁程よりあるまい。只非常に不規則な形で、所々に岩が自然の儘水際に横つて居る。縁の高さも、池の形の名狀し難い様に、波を打つて、色々な起伏を不規則に連ねて居る」と

あるのに全くあたらない。そこで想ひつくのは、五高の

裏の立田山の裾の細川侯の別邸から、少しはいつた處に  
かなり大きい幽邃な池がある。其の池が、草枕の鏡が池

の描寫によくあたつて居るやうに思はれる。そこでわた  
しは、夏目さんが五高の英語の先生をして居た間に、き

つと此の池を見たに違ひないとして、鏡が池の描寫は立  
田山の池を想つて出来たものと、獨りぢめして居る。尙

ほ「昔、志保田の嬢様が身を投げた」や、「あの志保田の  
家には代々氣狂が出来ます」なども言ふまでもなく、前

田家には跡かたも無いことである。斯んなことなど迄が  
書いてあるので、草枕は小天のことを書きながら、およ

そ日本の何處どこらのことかも知れないやうにしてあるのだ  
と見られる。

「川舟で久一さんを吉田停車場迄見送る」の吉田は、  
熊本から門司の方へ三つ目の驛のある、高瀬と聞いている

る。高瀬には、小天の海を舟で北に行つて、菊池川をさ

かのぼるのである。

なほ「平家の後裔のみ住み古したる孤村」は、小天村  
にはあたらず、肥後の國では五家莊のことである。

### 草枕の人々

前田家(「志保田」)は宮本武藏の後裔といふことで、其  
の先祖は何百年かの昔、小天にその草分けとして住みつ  
き、代々武術に名立たる家がらである。

草枕に「隠居「老人」とあるは、前田家の當時の家長  
案山子あやまといふ人で、槍の達人で(「弓が御好と見えます  
ね」若いうちは七分五厘まで引きました。押しは存外今  
でも慥かです)、明治の中頃の熊本地方での政友會の  
利者りしやで、熊本まで二里ばかりある路を、他人の土地をふ  
ますに行く時まで云はれた大地主で、税務署の役人など  
が來ると、子供のやうに扱ひながら厚くもてなし、村の  
租税を大いに負けさせて里人を喜ばせ、海岸に百町歩の

埋立てをして所をにぎはし、小天の清正公とも云はれた、覇氣のあつた人である。草枕の志保田の老人は骨董好きで通つてゐるが、舊家ではぶりのよかつた案山子老は、骨董も「素晴らしいもの」を随分もつては居たが、それだけの人では無かつた。それに明治の政界の立てもの、誰もがさうで有つたやうに、案山子老にも幾人かのお妾があつた。それで、前田家の隠居所であつた湯ノ浦の温泉宿には、たくさんの部屋があるのだと云ふ者もあつたが、案山子老は、お妾のことはとにかく、自分のこのみであゝいふ家を建てたが、闊達なたちとて、近所の百姓が來れば温泉に入れてやり、他所よそから然るべき人が來れば泊めてもてなしたのである。惜しいことに、わたしが小天に行つた時には此の老人は、もう彼の世に行つて居た。

案山子老の嫡子（「本家」）は下學といふ人で、これ亦劍道の達人で政界好き、ずつと東京でばかり暮して居て、

小天などには來なかつた。

ちやき／＼の東京つ子で、その容姿とたしなみを前田家から見こまれて、交通不便のむかし熊本くんだりの片田舎にはる／＼と來たはらからの、姉のふじ刀自は下學氏に、妹のはな刀自はその同腹の弟に、ふたり若き日に嫁いだのである。ふじ刀自は、とりわけ、常盤津と踊りどが上手で、さてこそ、湯ノ浦の前田家の別邸の客間の畳をあげると、踊りの舞臺になるわけである。ふじ刀自もはな刀自も、夏目さんを知つては居たが、親しくはなしをするやうな事は無かつたやうである。それは當時、本妻ばらの本家方と、お妻ばらが案山子老をだき込んだ隠居所方が仲がわるく、それがたう／＼大騒動にまでなつた程なので、夏目さんが小天に行つた頃には、兩方の行き來も無かつたくらゐで有つたらしいから、本家で暮して居た兩刀自が、隠居所の客人の夏目さんに、あふやうな事は無かつたからであらう。

おつなさん（お那美さん）は、幾人もあつたお婆ばらの子の一人で、きりやうすぢと云はれる前田一族のうち

でも、すぐれて美しい人であつたさうで、その若い時の

寫眞を見たが、たしかに然さうとなづかれた。わたしが小

天に行つた頃には、おつなさんは不遇で、東京の養育院

につとめて居るときで、小天にはまるで來ることが無か

つた。わたしは東京でおつなさんに會はうと思へば會へ

たのであるが、どうした風の吹きまはしか、會つて見た

いとも思はぬでは無かつたが、たう／＼會はなかつた。

それで、おつなさんの性行をよく知つて居るふじ刀自や

はな刀自や、其のほかいろ／＼の人から聞いて、わたし

獨りと思ひ倣して居る所から觀ると、草枕に、お那美さ

んの芝居じみたふるまひや、禪味がかつたうけこたへや

その複雑な表情などから、お那美さんの境遇や性分を

おしはかつて書いてあるのを見ると、夏目さんはおつな

さんの本性をしつかり掴んで、それを夏目さん一流に書

き變へたものと思はれる。而して其の一々は云ふにいはれぬ機微である。

おつなさんは男まさりではあるが（那美さんが軍人に

なつたら嘸強からう）、どこか人好きのするたちで、案

山子老の御氣に入りであつた。それで本妻ばらとお婆ば

らとが仲が悪くなつた時には、おつなさんが案山子老を

お婆ばらの方に取り込んだらしい（當り前でさあ。本家

の兄たあ、仲がわるしき）。此の隠居所方と本家方とに、

村の百姓が二つに分れて附いて、別にたいした怪我人も

出來なかつたが「今日けふも前田さんの戦争がある」と云ふ

やうな、お祭りめいた騒ぎが続き、その騒ぎのさなかに

本家が、火のけの無い所から出火して丸焼けとなつて、

怪しいと人の噂さに立つたりした。とゞのつまり、此の

争ひは裁判所にまでもち出されたが、おつなさんは裁判

官の前で滔々と辯じ立てたさうである。おつなさんは馬

には乗らなかつたが、薙刀が上手で、よく案山子老の槍

に稽古をつけて貰つたことである。熊本(「城下」)か何處かに嫁に行つたことが有ると聞いたと思ふが、これは確かでない。しかし次々と幾人かの男とつきあつて居たことは、いろいろの人から聞いた。夏目さんを知つて居る小天村の御醫者さんの家で、おつなさんの話しが出た時に、その奥さんが「おつなさんが夏目さんと一所に、あつちこつち出歩くので、村では大評判でしたよ」と云ふと、御醫者さんは「それはお前、そんな事を夏目さんもおつなさんも何とも思つて御坐るまいが、夫婦でさへ一所に出歩かない村の者が、夫婦でも無い男と女とが一所に出歩くのを見ては、びつくりして變に思つたのも無理は無いさ」と草枕の「非人情」の裏書きを、不充分ながらした。

案山子老の息女の一人は、明治時代の支那で活躍した宮崎滔天氏に嫁した。それに依るか依らぬか、孫文先生が亡命して日本に來たが、その身邊が危ふかつたので、

草枕そゞろごと

案山子老は先生を、東京のある寺の縁の下にかくして、ふじ刀自が毎日その食事を、こつそり持つて行つたと云ふことである(「なにね、あの隠居が東京に居た時分、わつしが近所にあるて、——それで知つてるのさ。いゝ人でさあ。ものゝ解つたね)。それで、湯ノ浦の前田家の別邸の客間に、孫文先生の額が掛けてあつた因縁がわかつた。そんなわけで、其の頃の前田家には、支那方面に行き來する人が幾人も出入りして居たので、滿洲に行く「野武士」がどれに當るやら、また支那に行く「久一さん」がどれに當るやら、ふじ刀自にもあてが附かないとの事である。

床屋は本村(ほんむら)に一軒あるが、其の親方は村の者で、草枕のそれとは似もつかない律儀(りつぎ)ものと聞いて、わたしは其の床屋に行つても見なかつた。また本村は海岸から五六丁山手で「生濇い磯から、鹽氣のある春風がふわり」と來て、親方の暖簾を眠たさうに煽る」以下の描寫にあ

たるやうな處は無い。ところが、わたしは前田家の別邸で、ふじ刀自と同年くらゐの男に會つた。その男と何かと話しながら、どうも百姓にしては少し骨のあることを云ふ男だと思つた。其の男が歸つたあとで「いまの男は村の者ですか」とふじ刀自に聞くと「ええ、今では村の者ですが、元はあれでも江戸つ兒ですよ。若い時には、

たいていのやんちやで、道樂をしたあげく東京をしくじつて、前田の隠居をたよつて小天に來たんですよ。根が器用なたちなので、隠居が何かと使つてやり、嫁の世話までしてやりました。今ではまるつきりの百姓になりきつて言葉まで變つちまつてますが、來たては江戸つ兒まる出しで、もとから火消しが大好きなのに、小天に來たら其れが無いので、隠居からお金を出して貰つて、消防組をこしらへて、自分がその頭かしらになつて納つて居たんですよ。ところが小天には火事なんて有りませんや、たつた一遍あつたきりですが、其れが小さい百姓家の納屋な

んで、消防がえらい勢で駆けつけた時には、焼け落ちてたんですから可笑しいの何んのか。……隠居をたよつて東京から來た者は幾らも有りましたが(實あ私もあの隠居さんを頼つて來たんですよ)、此所に住みついたのは、あれ一人つきりです」と話された。草枕の床屋の親方はおよそ此の邊であらう。

### きのついたこと

草枕は其の材料を東西古今、都鄙賢愚と自由自在に採つて來て微塵織としてゐるので、之れを一々挙げたら際限きりが無く、又それらを扱つて居る仕組みもさまざまであるが、今はともに其の片鱗を言ふまでとする。

### 一、草枕のたね。

(1)雲雀。草枕の隨所にある自然描寫には、それ〴〵異彩があるが、雲雀の鳴いて居るさまの書いてある所は、俳句そのまゝなのが面白い。

「忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、ここで鳴いてるか影も形も見えぬ。只聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空気が一面に蚤に刺されて居たゝまれない様な気がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない（下りてさへ尻のすわらぬ雲雀かな・雁宕）。のどかな春の日を鳴き盡くし、鳴きあかし、又鳴き暮さなければ気が済まんと見える（永き日を囀り足らぬ雲雀かな・芭蕉）。其上どこ迄も登つて行く、いつ迄も登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない（その骨の名は空にある雲雀かな・貞佐）。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに形は消えてなくなつて、只聲丈が空の裡に残るのかも知れない（隅もなき空にかくるゝ雲雀かな・六波）。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落つる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、茶の花が一面に見える。

雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛び上つてくるのかと思つた（草麥や雲雀があるあれ下がる・鬼貫）。次には落ちる雲雀と、上る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字に擦れ違ふときにも元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた」

（回）海と蜜柑。草枕の始めのあたりで、畫家が峠の茶屋から那古井へ行くのは、野出から湯ノ浦までの路で、眼下に島原海灣をへだてゝ雲仙岳の靈姿を見おろし乍ら、蜜柑山を下りるのであるが、草枕には其所にその美しい景色がまるで書いて無い。これは作者がわざと其れをはずしたと見られるのである。と云ふのは、峠の茶屋までは、七曲りあたりの峰や樹や山路や雲雀の鳴くさまなどを書き、つゞいて茶屋や婆さんや花嫁や長良の乙女などを書いた上に、美しい景色を更らに書き加へては、蛇足ともなる。そこで作者は、海と蜜柑は暫くとつて置いて、

草枕の終りのあたりでお那美さんが、滿洲に行く「御金を貰ひに來た、離縁された亭主」に山の中で逢つて、その歸りに畫家と一所に本家に寄つて、支那に行く久一さんに「そら御伯父さんの餞別だよ」と白鞘の短刀を投げて遣るなどの、あぢき無い世間場を、成るべく美しく見せるために、木瓜もつけて其のとつて置ききの蜜柑を所々に書き、おなじく海を美しく書いて居る。

「海は足の下に光る。遮る雲の一片さへ持たぬ春日影は、普く水の上を照らして、何時の間にかほとほりは波の底迄浸み渡つたと思はるゝ程暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流したる所々に、しるがねの細鱗を疊んで濃やかに動いて居る。春の日は限り無き天が下を照らして、天が下は限りなき水を湛へたる間には、白き帆が小指の爪程に見えるのみである。然も其帆は全く動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから渡つてくるときには、あんなに見えただであらう。其外は大干世界を極めて、

照らす日の世、照らさるゝ海の世のみである」

(ハ)添の人物。草枕の仕組みでは、添となる人物の著しいものは、茶屋の婆さんと、觀海寺の和尚と、床屋の親方とであつて、其のうちでも茶屋の婆さんは大役をして居る。而して此の三人はそれ〴〵風を變へて書かれて居るが、大凡いづれも美化して書かれて居るとも言へやう。茶屋の婆さんは「春の山路の景物」として、ひたすら美して書いてある。

「二三年前寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時これはうつくしい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが橋懸を五六歩來て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆んど眞むきに見えたから、あゝうつくしいと思つた時に、其表情はびしやりと心のカメラへ焼き付いて仕舞つた。茶店の婆さんの顔は此寫眞に血を通はした程似て居る」

然もその婆さんが「志保田の嬢様が城下へ御輿入のとき、嬢様を青馬に乗せて、源兵衛が羈縻はづなを牽いて通りました」と話し、それに連れて「長良の乙女」を語り、「あきづけばをばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」の歌を言ふに至つては、ますく美しい（「余はこんな山里へ来て、こんな婆さんから、こんな古雅な言葉でこんな古雅な話をきかうとは思ひがけなかつた」）。

觀海寺の和尚は、人々の庶幾するやうな僧として、淨らかに書いてある。

「彼の心は底のない囊の様に行き抜けである。何も停滯して居らん。随意に動き去り、任意に作し去つて、些の塵滓の腹部に沈澱する氣色がない。もし彼の腦裏に一點の趣味を貼し得たならば、彼は之く所に同化して、行屎走尿の際にも、完全たる藝術家として存在し得るだらう」

床屋の親方は、江戸つ兒一流のさつぱりした滑稽な男として、然も「畫にも詩にもなる男だ」と書いてある。

「今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽を演じてゐる。長閑な春の感じを壞すべき筈の彼は、却つて長閑な春の感じを刻意に添へつゝある。余は思はず彌生半ばに呑氣な彌次と近付になつた様な氣持になつた。此極めて安價なる氣焰家は、太平の象を具したる春の日に尤も調和せる一彩色である」

(二)立役たてやくの二人。草枕ではお那美さんと畫家とが立役者である。「お那美さん」のことは、いろ／＼の姿、變つたふるまひ、をり／＼の美しさ、こみ入つた表情など、隨所に書いてある上に、茶屋の婆さんに語らせ、床屋の親方に彌次らせ、馬子の源兵衛に話させ、觀海寺の和尚に賛めさせて居る。而して畫家は事ごとに自分の識見を言つて居る。之れは草枕の仕組みでは、此の二人が共に立役をして居るからである。そこで草枕のしくみを觀てと

らなければ、この二人のうごきは辨ら<sup>わ</sup>ない。

二、草枕のしくみ。

およそ文藝は古へからの人の作を觀たり、自らも作つて樂しむのが道ではあるが、其のほかに自分の境涯と、それに纏<sup>まと</sup>つて來る有象無象をも亦、繪畫として見たり、音樂として聞いたり、詩歌として味はつたりして、見透しの天神八方睨みが、何ごとも無いやうに、此の娑婆世界を通り越すのも、亦その道であらう(「住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き抜いて、有難い世界をよのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるは音樂と彫刻である。こまかに云へば寫さないでもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き歌も湧く。着想を紙に落さぬとも瑠鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じて得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうららかに收め得れば足る。この故に無聲の詩

人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人世を觀じて得るの點に於いて、かく煩惱を解脱するの點に於いて、かく清淨界に出入し得るの點に於いて、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於いて、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於いて——千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である」

是れは文藝の涅槃とも見られる(松浦一著「文學の本質」参照)。涅槃に入るまでは往相であるが、涅槃に入つてからは還相である。而して往相は自ら涅槃におもむく態であるから還相を影とし、還相は他のものを涅槃に入らしむる態であるから往相を影として居る。惟れを人間について云ふと、往相の人は還相のものを怙恃として涅槃におもむき、還相のものは往相の人を見護つて之れを涅槃にみちびく。これに依つて斯う言ふと、草枕がひどく抹香臭くなるが、草枕は、往相のお那美さんを還相の畫家が見護つて、其の涅槃に入るに至り、之れに印可を

興へるのを、その仕細みの骨子として居るとも見られる。さうすると、畫家がお那美さんの表情などから其の天性や境遇を推して言ふことに、お那美さんの往相が顯はされて居るともいはれ、「そんなに可愛いなら、佛様の前で、一所に寝ようつて、出し抜けに泰安さんの頸つ玉へかじりついたんでさあ」をはじめ、「薩はし、見境のねえ女だから困つちまはあ」や、「驚いた、驚いた、驚いたでせう」の件や、「どうするつて、譯ないぢやありませんか。さ、だ男もさ、べ男も、男妾にする計りですわ」と云ひ放すなどには還相の影がさして居るともいはれる。また畫家が事ごとに自分の識見を言つて居るところに、還相が漲つて居り、「屁の勘定をされちや、なり切れませんよ」あたりには往相の影がさして居るともいはれる。而してお那美さんが涅槃に入つた證は「憐れ」である。

「憐れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である。お那美さんの表情のうちには此憐れの念が少

しもあらはれて居らぬ。そこで物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、此情があゝの女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが畫は成就するであらう」

なるほど「憐れ」は神の知らぬ情であるかも知れないが、佛は之れを知つて御坐る。涅槃より生れた還相は、「哀愍」をその淨念とする。哀は悲なり、愍は慈なり。哀愍は慈悲なり、憐れみいつくしむなり。斯くて「憐れ」はお那美さんの入涅槃の證となつて、茲に草枕の點青をなして一篇を結んで居る。

「茶色のはげた中折帽の下から、髯だらけの野武士が名残り惜氣に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思はず顔を見合せた。鐵車はごり／＼と運轉する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも今迄かつて見た事のない『憐れ』が一面浮いてゐる。『それだ！それだ！それが出れば畫になります』と余は那美さん

の肩を叩きながら小聲に云つた。余が胸中の畫面は此咄嗟の際に成就したのである」。

ところが之れとよく似た仕細みが謡曲にある。茲に「采女」を見るに、諸國一見の僧(ワキ。還相)が奈良に行つて春日の社に參詣すると、そこに里の女(前シテ)が居て社の由來を語り、なほ猿澤の池にあんないして「こなたへ御ん出で候へ。これこそ猿澤の池にて候へ。

また思ふ子細の候へば、この池のほとりにて、御ん經を讀み佛事をなし賜はり候へ」と云つて「吾妹子が寝くれた髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しき」の歌をひいて聖武の帝と采女の物語りをかたり了つて、「われは采女の幽靈とて、いけみづに入りにけり、池水の底に入りにけり」となる。そこで僧が「池の波、よるの汀に坐をなしで、かりに見えつるまぼろしの、采女の衣のいろくくに、申らふ法ぞまことなる」と誦へば、采女の幽靈(後シテ、往相)が出て、後シテとワキと地とで、(以下●印は後シ

テ、▲印はワキ、■印は地)「不思議やな池の汀に顯はれ給ふは、采女と聞きつる人やらん。●恥づかしながらいにしへの、采女が姿を顯はすなり、佛果を得しめおはしませ。▲もとよりも人々同じ佛性なり、なに疑ひもなみの上。●水の底なる鱗や。▲乃至草木國土まで。●悉皆成佛。▲疑ひなし。■ましてや人間に於てをや、龍女が如く我れもはや、變成男子なり、采女とな思ひ給ひそ、しかも所は補陀洛の、南の岸に至りたり、是れぞ南方無垢世界、生まれん事も頼もしや」と采女の入涅槃を顯はし、そのかみ葛城の王のすさまじき心を解かんとて、陸奥の采女が「淺香山かげさへ見ゆる山の井の、淺き心はわれ思はなくに」と詠んだすちの「曲」に次いで、みづからが帝の曲水の宴に侍つたさまなどを、舞ひ謡つてから、「遊樂の夜すがら是れ采女の戯れと思すなよ、讚佛乘の因縁なるものを、よく申はせ給へやとて、又なみに入りにけり。また波の底に入りにけり」で終りとなる。

此のやうな仕組みから成つて居るものは謡曲には幾つ  
もあつて、趣きはやゝ違ふが、求塚や檜垣もまた此のた  
ぐひである。謡曲の此のしくみに擬なまへると、草枕は畫家  
(ワキ)と、茶屋の婆さん(前シテ)と、お那美さん  
(後シテ)とが仕て居る能であると言へもしやう(しば  
らく此の旅行中に起る出来事と、旅行中に相逢ふ人間を  
能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだらう)。然  
うなると草枕は、おもてに低徊趣味を漂はしては居るが、  
其の本質は正眞のロマンスである。そこで高砂の姫も、  
長良の乙女も、その歌も、その五輪塔も、わざとらしく  
無く、びつたりと板について見える。なほ檜垣に謡はれ  
た岩戸觀音が、近くに在るのも何かの因縁であらう。

斯やうにシムブルな謡曲の仕組みをその骨子として草  
枕は出来て居るのであつて、其れに俳諧味(描寫、畫家  
の句作など)、漢詩味(古詩、畫家の詩作など)、禪味(高  
泉和尚、大慧禪師、觀海寺の和尚、お那美さん)、芝居味

(お那美さんのふるまひ)に、落語味(床屋の親方)や、  
はだかのお那美さんまで付け加へて、頗るこみ入つて書  
いてあるが、もどく其の仕組みがシムブルなので、そ  
れが何ほどこみ入つて居ても、そこに一路が通つて居る。  
尙ほ草枕には無頓着の用語が、かなり有るが、それが  
別段目障りにならないのが不思議なくらゐである。

それから之れは末のく事であるが、草枕には句讀點  
がこまかく入れてあつて、讀むのに樂で解りやすい様に  
してあるのも作者一流である。

わたしが草枕について、さしあたり氣の付いたことは  
斯んなものである。

あとがき

わたしは夏目さんの作はすべて讀んでゐるが、他の人  
が夏目さんの作について書いたものは一つも讀んで居な  
いので、茲に書いたことの中には、誰れ彼れが既に云つ

て、今更らでも無いことが有るに違ひないと思ひ乍らも、そんなことは何も知らないわたしが、草枕について知つて居るだけの事を思ふまゝに書き、ついでに、わたしの言ひたいことの涓埃を露呈したものととして、たゞく一願していたゞき度いと希ふのみである。

尙ほわたしは、夏目さんが熊本を去られた明治三十六年（草枕が出たのは三十九年）から八年目の四十四年に

五高に入學したのである。而して、わたしが熊本を去つてから今は三十年にもなるが、其の間わたしは小天に行つたことが無い。それで茲に書いた中には、今は跡かたも無くなつて居ることが多々あらうと思ふ。又こゝに書いた人々は、およそ亡きかすに入つて居るのを思ふと寂しくもなる。

筆者 和 南